

國學院大學の学生として、4学年を通して学び誇るべき学風と伝統を身につけて卒業できるように、まずはわたしたちの大學のことを、より深く知ってほしいと思います。國學院大學が皆さんの輝かしい人生にとって、確かな心の拠り所となることを願っています。

1 身のまわりのことから考えてみよう！

1 現代日本社会の実像と虚像

國學院大學は平成24年に創立130周年を迎えました。その長い歴史は、わが国の近現代の歩みでもあります。そして、現代はグローバル化やIT化の急速な進展、携帯電話・パソコンの普及など、とても便利で豊かな時代になりました。しかし、連日ニュースで報道されているように、頻発する狂気的な殺人事件、企業や官公庁・教育界における組織的な犯罪行為、いじめによる自殺問題などなど、現代日本社会は倫理観や道徳観が失われて、社会的病理現象に侵されているとも言えましょう。

2 身近なところに

IT社会は簡単にさまざまな情報を得ることを可能にしましたが、氾濫する情報から真偽が見えにくくなり、インターネットではニュースでさえも興味本位に傾き、事実と宣伝を混在させ、ひいては現実と仮想の分別まで混乱させてしまっているようです。街や電車内・インターネットなど、いやおうなしに目に飛び込んでくるファッション広告、また、規制緩和による自由化は、あらゆる分野で利己主義に置き換えられてしまった感があります。

都会の暮らしや流行を追いかければ現代人、外国ブランドを身にまえば国際人、というわけではありません。氾濫する情報に踊らされることなく、皆さん自身の価値観で、「何が新しく生まれた美しいもので、何が失われてゆく大切なものなのか」をよく吟味することが必要です。さらに、実際に自分の眼で広く社会を見聞きしたり、多くの人びとと語り合って、世界にひとつしかない個性を磨いてください。学生時代はみずからの人生観を熟慮する絶好の機会なのです。

3 大学生として

振り返れば、学問と現実の違い、情報と事実とのズレ、日本と外国との差異などは、ごく身近なところにもたくさんあります。その中で、変えてはならない真実とは何か。一生を貫く立脚点はどこに置くべきか。移ろいゆく現象について眼が行きがちですが、グローバル化のなかで真の国際交流には、自国と他国の総理解が不可欠です。日本人は流行やブランド・イメージに非常に影響されやすく、かつ冷めやすいと言われていていますので、皆さんも注意が必要です。

では國學院の学生として、どのような大学生活を送るべきでしょうか。

4 昨今の日本に欠けているもの

近年、「日本人の品格・美風が地に墮ちた」と言われます。日本人は明治の開国以来、多くの外国人から賞賛されていました。すなわち、「勤勉」「親切で思いやりがある」「責任感が強い」「清潔で人も物も町も全てが整然としている」「教育熱心」「高い技術力」などです。今はどうでしょうか。

「現代日本社会は精神的に幼稚化している」「今の日本の若者は社会によって作り出された世代、大人の世界の反映」とする見解もあり、「人間をつくり育てることはどういうことなのか」、教育の根幹について、国や社会全体、大学での早急な対策が不可欠です。

5 過去を学んで今を知る

近年の日本の変化の要因は、一体どこにあるのでしょうか。くしくも現代日本の社会情勢には、國學院大學が生まれるべくして生まれた、明治の時代背景とも共通性があるので、日本を正常化して、子どもたちにも明るい未来を築いてゆくためには何が必要でしょうか。実はそのヒントが、國學院大學創立の背景と建学の精神に秘められているのです。

2 國學院大學の歴史

1 創立の時代背景

明治維新政府は、中央集権国家の確立や不平等条約の改正のために、進歩的な改革を押し進めましたが、世界の先進国に追いつくことを急ぐあまり、「鹿鳴館時代」に象徴される欧化万能の風潮が日本全土をおおいました。

しかしその間に、心ある人びとから「日本が独立した国家として発展するためには、西

欧文明の無批判的な模倣ではなく、日本古来の思想や文物・民族性に基づく国づくりが必要である。」という声が聞かれるようになりました。このような反省の気運を背景として創設されたのが、國學院大學の母体となる「皇典講究所」なのです。

2 「建学の精神」ここに生まれる

明治15年（1882）11月4日、「皇典講究所」の開校式に臨んだ有栖川宮熈仁親王は、初代総裁として教職員・生徒に対して、次の「告諭」を述べられました。

「凡^{オヨソ}学問ノ道ハ本^{モト}ヲ立ツルヨリ大ナルハ莫シ、
故^{ユエ}ニ国体ヲ講明シテ以テ立国ノ基礎^{カク}ヲ鞏クシ、
徳性^{カンヨウ}ヲ涵養シテ以テ人生ノ本分^{ツク}ヲ尽スハ百世^{ヒヤクセカ}易フベカラザル典則ナリ、
而^{シカ}シテ世^ヨ或^{アル}ハ此ニ暗シ、
是^コレ本^{ホンコウ}鬻^{コウ}ノ設立^{ユエン}ヲ要スル所以ナリ、
今ヨリ後、職員生徒^コ此ノ意ヲ体シ、
夙^{シユク}夜^ヤ懈^{オコタ}ルコト無ク、
本^{ホンコウ}鬻^{リウショウ}ノ隆昌^{リウショウ}ヲ永遠^{ユウエン}ニ期セヨ」

3 「建学の精神」について

國學院大學の「建学の精神」は、この「告諭」の「本ヲ立ツル」ことを基底としています。すなわち「根本を究める」ことが大事だということです。そのためには、「国体の講明」と「徳性の涵養」が重要であると説きます。

「国体の講明」とは、日本固有の国柄や国民性を研究すること。具体的には、日本の文化・文学・歴史・神道・哲学・政治・経済・法律などの研究を通して、「日本のアイデンティティー」を探求することと言えます。国際交流が必須となった現代においても、日本とはどういう国なのか、日本人の生き方などについて知ることが、より大前提となります。そのための教育・研究が國學院大學の基本的役割のひとつなのです。

「徳性の涵養」とは、日本人が持つ、敬い・慈しみ・慎み・感謝・思いやる心、といった国民性を継承し、立派な人格を形成して人生の大道（道義）を歩むことです。残念ながら戦後の高度経済成長期には、「消費は美德」とまで言われ、道徳的意識の重要性は軽視されました。しかし國學院大學は、「建学の精神」に基づいた教育を常に心掛け、奉仕活動や研究・教育におけるフィールドワークの重視、道徳の実践など、普遍的な「人間教育」

に力を注いできました。

4 「建学の精神」は時を越えて

現代日本のさまざまな変化の要因は、乱開発や消費優先で自然に対する畏敬と感謝の気持ちを忘れ、過去の文物や教訓・伝統などを顧みることなく、ひたすら目先の利益や便利さ・敏速さ・快適さに溺れ、表面的な美しさや建て前をつくろうことに慣れてしまったことにあるのではないのでしょうか。時には立ち止まって、われわれはどこから来てどこに向かって進もうとしているのかと問いかける、つまり「根本」をよく考える必要があるのです。

國學院大學の「建学の精神」は、現代日本人の心の拠り所として、失われつつある日本の「品格」や「美風」を取り戻す原動力ともなりうるのです。その日本の根源とも言える神道精神に基づく道義の大学として、今こそ國學院大學の社会的使命は一段と増幅されたと言えましょう。

つまり日本人は古代から、諸外国が持つ「宗教」という概念では解明できない、「神道」という独得の文化を大切にしてきました。全国津々浦々の鎮守の森にたたずむ神社の存在は、日常生活のなかで身近な存在でした。外来の宗教や思想・文化に関しても、その時代ごとに十分に消化吸収して独自の伝統文化を培ってきました。

初代総裁有栖川宮^{ありすがわのみやかひと}職仁親王の「告諭」に敬意を表すとともに、その「精神」を学んで継承してゆくことは、國學院大學の誇りであり責務なのです。日本の伝統や風習・価値観などを真摯に見つめ直し、その真理や美と心を体得して、日本の真の発展や国際社会に貢献することが期待されている大学なのです。皆さんもこのような深い意味のある「建学の精神」を心の糧に、これからの人生を潤い豊かに自信をもって歩んでください。

5 「國學院」の宣言高く

皇典講究所は欧米の大学を倣って設立された東京大学とは別に、伝統文化を明らかにする教育研究機関として発足し、国の教育政策に合わせて規模の拡大を図り、さらに国法を攷究することを計画しましたが時世に合わず、明治22年（1889）には「日本法律学校」（現在の日本大学）を開設することとし、翌明治23年（1890）に、改めて国史・国文・国法を攷究する教育機関として「國學院」を開設しました。

特に「國學院」の開設と運営には、明治4年（1871）から明治6年（1873）まで、岩倉

具視を団長として欧米諸国を巡検した、いわゆる「岩倉遣外使節団」の同行者（山田^{あき}顯^{よし}・佐佐木高行・高崎正風・井上^{こし}毅ら）が多数関わっていたことは特筆すべきです。彼らの多くは、国学の他に漢学・洋学などの諸学を修め、欧米諸国を実際に視察した、明治政府の役人であり文人でもあるというオールマイティーな国際人でした。

また、皇典講究所が設立された明治15年に、伝統的国漢諸学の高等教育機関として東京大学文学部に古典講習科が設置されました（その卒業生は後年わが国の伝統諸学の指導者となった）が、2回生で打切られたので、その教員・卒業生を受け入れてその学問を継承したのが「國學院」であったのです。さらには、明治9年に遡る神官養成を目的とする神道事務局の生徒寮も受け継ぎました。

そもそも「國學」とは、日本の古典研究から日本人の思想や文化を明らかにする、江戸時代に興った総合的な学問であり、「建学の精神」と呼応して「日本のアイデンティティー」を探求する学問といえます。日本の大学のほとんどが、西洋の学問や実学に根ざして開校しましたが、國學院大學は日本の近代化の原動力となり民族の叡智を受け継いだ国学、漢学を講ずると共に、広く外国の進んだ学問をも取り入れようとする理想を掲げた教育機関であり、「日本学」を教育理念として開校した貴重な校風の大学なのです。

6 校歌に込められた「建学の精神」

大学令の公布（大正7年）に基づき、大正9年（1920）、國學院大學は慶應義塾・早稲田・明治・中央・日本・法政・同志社と共に大学に昇格し、最初の私立大学の一つとなりました。それ以前に大学として扱われていたのは、東京・京都・東北・九州・北海道の各帝国大学だけでした。

これを機に芳賀矢一学長は校歌を作詞し、「澁谷の岡に大學たり、古へ今の書明らめて、國の基を究むるところ」「外つ國々の長きを採りて、我が短きを補ふ世にも、いかで忘れむもつ教は、いよ、みがかむもつ心は」「國學院の宣言高く、祖先の道は見よこゝにあり、子孫の道は見よこゝにあり」と、「建学の精神」を高らかにうたいあげたのです。



皇典講究所 発祥記念碑

7 戦後の発展

戦後、他大学に先駆けて男女共学制を採用し、昭和23年（1948）に新制度による文学部を開設して以来、学部新設と改廃を経て、昭和41年（1966）には文学部・法学部・経済学部から成る文科系総合大学に発展しました。大学院も昭和26年（1951）の文学研究科神道学・日本文学専攻修士課程に始まり、日本史学専攻の修士課程、さらに文学研究科博士課程を順次開設し、昭和45年（1970）までに法学・経済学研究科の修士・博士両課程もそろいました。

8 國學院大學21世紀研究教育計画

平成14年（2002）に創立120周年を記念して、「建学の精神」を核としつつIT化・国際化など、時代の変革に対応できる体制を確立すべく、「國學院大學21世紀研究教育計画」を策定しました。この大改革の骨子は、①教育・研究の場の整備、②開かれた大学の実現、③高等教育政策・制度の変化への敏速な対応、④諸活動を通じての社会的認知の向上、の4点です。

その5年後には計画の見直しを行い、平成20年に「研究教育開発推進に関する指針」を策定しました。それに基づき、指針に宣言する「伝統と創造」「個性と共生」「地域性と国際性」の調和を「3つの^{おも}慮い」とし、それを支える基盤整備を「5つの^{もと}基い」とする立案・実行・検証を循環的に運営する責任体制を整えました。

創立130周年を迎えた平成24年には、新たに第3次計画を策定し、「3つの慮い」を大学の使命（mission）と位置づけ、大学の将来（vision）を支える、「5つの基い」を行動計画（action）とし、より相互の関連性を明確にして、具体例を通して学生の皆さんも理解しやすい示し方としました。

9 渋谷キャンパス再開発

平成14年に120周年記念事業として着手した渋谷キャンパス再開発は、約10年の歳月をかけて「120周年記念1・2号館」「若木タワー」「学術メディアセンター（AMC）」「3号館」を竣工し完成をみました。

今後は130周年記念事業として、体育館の敷地に複合施設を建設する計画等を中心とした、第2次開発がスタートする予定です。

Ⅹ研究開発推進機構の発足と学術メディアセンター

「学術メディアセンター」は、「21世紀COEプログラム」によって、従前以上に拡大された研究を遂行するため、これまでの日本文化研究所をはじめとする各種研究所・資料館・記念室・図書館などを統合して、平成20年に竣工した複合研究機関です。平成19年に発足した「國學院大學研究開発推進機構」の統括のもと、「建学の精神」に基づく特色ある研究を推進し、その成果をもって広く社会に貢献することを目的とします。この「学術メディアセンター」は、「日本文化の総合的研究と発信のための世界的研究教育センター」として、日本のみならず人類文化に広く貢献することでしょう。

Ⅺ教育開発推進機構の発足

少子化が進む日本社会は本格的な大学全入時代を迎えつつあります。それにともない多くの大学で、学力面でも志向性の面でもこれまで以上に多様な学生を受け入れるようになっていきます。本学も例外ではなく、社会に有為な人材を送り出す高等教育機関であることをいっそう自覚して、大学の個性である建学の精神のもとに教育の質の向上をはかり、社会的役割を十分に果たしてゆけるように機能強化を進める必要があります。そのため、平成21年に「教育開発推進機構」が発足しました。ここでは、本学の教育力向上と教養教育に関する調査・研究を行い、全学的もしくは各学部の教育に関わる人材育成を支援することを目的として、「教育開発センター」、「共通教育センター」、「学修支援センター」の3つのセンター組織を運営し、さまざまな事業を展開しています。詳しくは第8章「教育開発推進機構による教育力向上の支援と修学サポート」をご覧ください。

Ⅻ人間開発学部の開設

創立120周年を迎えた平成14年に神道文化学部を開設し、平成16年の法科大学院開設に続き、平成21年、國學院大學に「人間力の育成」を目標に掲げる新しい教育系学部、「人間開発学部」が開設されました。人間のもつ資質・能力を可能なかぎり引き出し、育成すること、すなわち高度な教育力と指導力をそなえた人材を輩出することが人間開発学部の目標です。人間開発学部は、横浜たまプラーザキャンパスを拠点に、少人数教育による「響同」学習をめざしています。

3 これからの國學院大學

1 普遍性・人間性の共有社会に向けて

これまで皆さんの中には、現代生活には古い歴史や古典（古文・漢文・哲学など）の学習は不要と思っていた方もいるでしょう。しかし、次々に移り変わる現代の諸事象の根底にある本質を見抜く力は、長い間の先人の知恵である古典とその学びの中に伝えられているのです。明治・大正・昭和の先賢が欧米の学問や技術を完璧に修得できたのも、古典学習の力があつたからです。その上で現在の新しい学問を身につけるといふ欲張りなまでの二層構造こそ、「國學院」の特長といえるのです。

いま世界に求められているものは、多様な文化の独自性の尊重と同時に普遍性の共有です。このことは個性の尊重と人間性の共有と置き換えてもよいでしょう。過去と現代、あるいは日本と世界をいくつもの対角線で結び付けて、関係と差異を見きわめ、人類の適切な発展のために世界に広く発信してゆくことも國學院大學の重要な使命なのです。

2 國學院大學と共に

國學院大學では、この導入教育をはじめ、普遍的人間性に立脚した皆さん一人ひとりの価値観形成に寄与する教育を行っています。皆さんがさまざまな問題意識を持って、國學院大學の教育研究活動に積極的に参加することは、國學院大學と現代史を共有することになるのです。皆さんが國學院大學を礎に、日本や世界の将来を切り拓く真の日本人・国際人として飛翔することを大いに期待しています。

國學院大學に関心をいだいて、さらに詳しく知りたい場合は、大学HPの図書館蔵書検索サイトで、『國學院大學百年史』『國學院大學百二十年小史』と入力して調べてみてください。

國學院大學の歴史

明治15(1882)年の皇典講究所の創設



明治15年に創設された皇典講究所は、皇室の援助や総裁官をはじめとする関係者の努力により、神職試験を執行し、文学部と作業部の授業を通して有為の人材を育ててきた。また時代の進展とともに私立補充中学校を開設した。同校は「共立」「城北尋常」「城北」と順次名を改め、明治34年に「府立第4中学校」、昭和25年には「都立戸山高等学校」となり今日に至っている。次いで明治22年、国法を専修する「日本法律学校」(現在の日本大学)を開設した。

明治23(1890)年の國學院の設立

「國學院設立趣意書」に詳細に記されているが、国史・国文・国法の攷究機関として、本科3年と研究科2年の教育機関である「國學院」を設立した。

明治30年代の國學院大學



皇典講究所飯田町校舎(明治末期)

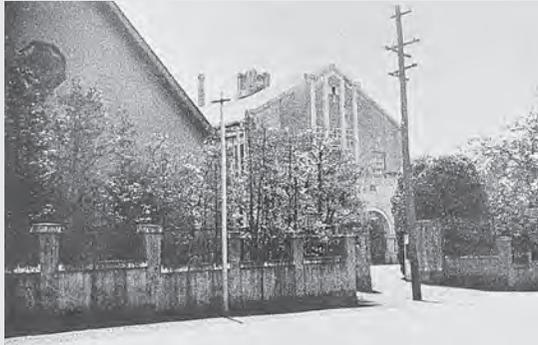
明治31年に財団法人の認可を受け、経営的基礎の確立を計ったが、明治35年、39年の2度の火災や、創設に関わった方々の相次ぐ死去によりその経営は必ずしも順調ではなかった。

明治36年9月、第一回卒業生を世に送ってから、経済的理由により自然休校していた研究科を再開し、明治36年公布の専門学校令により、翌37年に専門学校に昇格。その機会に大学部予科2年と大学部本科3年を設置。従来の国語漢文歴史科を師範部国語漢文科、歴史地理科とし、別に専修部を併置。明治39年には「私立國學院大學」と改称した。

大正9年の大学令による大学に昇格

大正7年12月の大学令公布に基づき、大正9年4月、大学令大学への昇格が認可された。名実ともに完備した大学に昇格したことにより、本学はますます学界・教育界に重きをなすことになった。この時、大学に昇格したのは2月5日付で慶應義塾・早稲田、4月15日付で國學院・明治・法政・中央・日本・同志社であった。

大正12年の渋谷氷川裏御料地移転



渋谷校地の正門付近

学生数の増加に対処するため、大正7年に拡張計画に着手。大正11年10月、校地を渋谷氷川裏の御料地、現在の渋谷若木が丘に求める。大正12年5月竣功。

昭和初期の発展と戦後皇典講究所の解散

昭和10年頃までの本学は発展の一途をたどり、本学の歴史の中でも「黄金期」というべき華やかな時代を迎えた。

しかし、第二次世界大戦後、GHQ（連合国最高司令官総司令部）は、神道指令を発し神社に圧迫を加えるが、GHQの意図が神社神道から国家的性格を除こうとするもので、宗教としての神道を抹殺しようとするものではないことを知り、本学は信教の自由という立場から神道精神に基づく学校として財団法人となし、合わせて経営母体である皇典講究所を解散させて新発足し、新時代の要請に応え得る大学への脱皮を図った。

昭和20～30年代の國學院大學

昭和21年、他大学に先駆けて男女共学制を採用。昭和23年には新制文学部、翌年には政治学部（昭和25年政経学部と改称）と文学部第二部を開設。昭和26年、学校法人國學院大學に改め、旧制学部第一部、専門部を廃止、政経学部第二部を開設し、大学院文学研究科神道学専攻・日本文学専攻の修士課程を開設、文学部神道研修別科を開設。翌年には日本史学専攻の修士課程を開設。また昭和28年には、旧制第二部文学部を廃止、日本文学専攻、日本史学専攻の博士課程を順次開設した。

昭和30年「日本文化に関する精深な研究を行い、これを汎く世界文化と比較しつつ、民族的伝統の本質と諸相とを把握すること」を目的とした日本文化研究所を設立。昭和33年には神道学専攻の博士課程を開設し、神道専修科を神道学専攻科に改めた。昭和35年には、栃木県栃木市に栃木高等学校を開設（昭和38年姉妹法人として独立）。昭和38年には、創学以来の懸案であった法学部第一部を開設した。

昭和40～60年代の國學院大學

昭和40年に法学部第二部を開設、翌年には政経学部を発展的に解消し、経済学部第一部、第二部を開設し、ここに三学部からなる新制総合大学の形態を整えるに至った。昭和42年には、大学院法学研究科修士課程、文学部第二部神道学科を開設、八王子校舎にて授業開始。昭和43年、大学院経済学研究科修士課程を開設、昭和44年、大学院法学研究科博士課程を開設、昭和45年、大学院経済学研究科博士課程を開設するなど、名実共に人文科学系総合大学として教育・研究の態勢が完成した。昭和57年、創立100周年を迎えた。

平成の國學院大學



平成2(1990)年「國學院」宣言100周年を迎えた。平成3年、傘下の短期大学である國學院女子短期大学を國學院短期大学に校名変更し、男女共学に移行。平成4年、第100回卒業式を挙行。第一部1・2年生の授業を横浜たまプラーザキャンパスで開始。平成8年、文学部及び経済学部を改組し、文学部第一部日本文学科・中国文学科・外国語文化学科、経済学部第一部経済ネットワーク学学科、第二部産業消費情報学科を開設。相模原キャンパス開校。平成9年、創立115周年を迎えた。

現在の國學院大學



平成14年4月には神道文化学部（昼夜開講制）を新設し、平成16年4月には法科大学院を開設、続く平成17年4月には経済学部経営学科を開設しました。さらに平成21年4月、横浜たまプラーザキャンパスに人間開発学部（初等教育学科・健康体育学科）を開設し、平成25年4月には、新たに子ども支援学科を開設しました。

國學院大學の歩み

明治15(1882)年	皇典講究所の創設（千代田区飯田橋）
明治23(1890)年	古事類苑編纂事業を委託される（明治28年、神宮司庁に委託転換）、皇典講究所に國學院を設立
明治37(1904)年	「専門学校令」による専門学校に昇格
明治39(1906)年	私立國學院大學と改称
大正 8 (1919)年	國學院大學と改称
大正 9 (1920)年	「大学令」による大学に昇格
大正12(1923)年	渋谷氷川裏御料地に移転
昭和21(1946)年	皇典講究所の解散、財団法人國學院大學を設立
昭和22(1947)年	学部第二部を開設
昭和23(1948)年	新制文学部を開設、國學院高等学校を開設、目白学園を合併
昭和24(1949)年	新制文学部第二部を開設、目白分校にて授業開始、政治学部を開設
昭和25(1950)年	政治学部を政経学部拡充
昭和26(1951)年	学校法人國學院大學となる、旧制学部第一部・専門部を廃止、政経学部第二部を開設、大学院文学研究科修士課程を開設、文学部神道研修別科を開設
昭和27(1952)年	久我山学園（久我山高等学校・久我山中学校）を合併
昭和28(1953)年	旧制第二部文学部を廃止、目白分校での授業撤退、大学院文学研究科博士課程を開設、久我山分校で授業開始
昭和29(1954)年	付属幼稚園を開設
昭和30(1955)年	幼稚園教員養成所を開設、日本文化研究所を設立
昭和33(1958)年	久我山分校での授業撤退、神道専修科を神道学専攻科に改める、蓼科寮を開設
昭和35(1960)年	栃木高等学校を開設（昭和38年姉妹法人として独立）
昭和38(1963)年	法学部第一部を開設
昭和40(1965)年	法学部第二部を開設
昭和41(1966)年	政経学部第一部・第二部を廃止、経済学部第一部・第二部を開設
昭和42(1967)年	大学院法学研究科修士課程、文学部第二部神道学科を開設、八王子校舎にて授業開始
昭和43(1968)年	大学院経済学研究科修士課程を開設
昭和44(1969)年	大学院法学研究科博士課程を開設、國學院幼稚園を開設
昭和45(1970)年	大学院経済学研究科博士課程を開設
昭和52(1977)年	幼稚園教員養成所（各種学校）を幼児教育専門学校（専修学校）に改組
昭和57(1982)年	創立100周年を迎える、國學院女子短期大学を開設（北海道滝川市）
昭和60(1985)年	八王子分校舎での授業終了、新石川校舎（現横浜たまプラーザキャンパス）で授業開始、久我山中学校再開、高等学校に女子学級を開設、皇典講究所発祥記念碑を日本大学と建立（千代田区飯田橋3-5-5）
昭和62(1987)年	新院友会館竣工
平成 2 (1990)年	「國學院」宣言100周年を迎える
平成 3 (1991)年	國學院女子短期大学を國學院短期大学に校名変更し男女共学に移行、八王子分校舎撤退
平成 4 (1992)年	第100回卒業式を挙行、第一部1・2年生の授業を現横浜たまプラーザキャンパスで開始
平成 8 (1996)年	文学部第一部日本文学科・中国文学科・外国語文化学科、経済学部第一部経済ネットワーク学科、第二部産業消費情報学科を開設、相模原キャンパス開校
平成13(2001)年	法学部・経済学部の第二部を廃止し、昼夜開講制に移行
平成14(2002)年	文学部神道学科（一部・二部）を改組して、神道文化学部神道文化学科を開設
平成15(2003)年	120周年記念1号館竣工（3月）
平成16(2004)年	法科大学院開設、120周年記念2号館竣工（7月）
平成17(2005)年	経済学部に経営学科を開設、文学部日本文学科・史学科昼夜開講制を導入
平成18(2006)年	若木タワー（地下1階、地上18階）竣工（5月）、学術メディアセンター棟（仮称）着工（10月）
平成19(2007)年	創立125周年を迎える
平成20(2008)年	学術メディアセンター（地下2階、地上6階）竣工（3月）
平成21(2009)年	人間開発学部開設（横浜たまプラーザキャンパス）
平成24(2012)年	創立130周年を迎える
平成25(2013)年	人間開発学部子ども支援学科を開設